

モードのジヤポニスム

キモノから生まれたゆとりの美

JAPONISM IN FASHION

1994年4月5日(火)～6月19日(日) 京都国立近代美術館 主催：京都国立近代美術館 京都服飾文化研究財団

後援 外務省、通商産業省、文化庁、フランス大使館、オランダ大使館、京都府、京都市、京都商工会議所、NHK京都放送局
協賛 日本アパレル産業協会、日本ボディファッション協会、日本航空、東京海上火災、JR西日本 協力 株式会社ワコール

異国風俗と装飾

—モネの「カミーユ」再考—

稲賀繁美

三重大学人文学部文化学科助教授

「カミーユ」(あるいは「ラ・ジャポネーズ」)はモネの画業のなかでも特異で孤立しており、モネ自身晩年には気まぐれから生まれたがらくたとしか評価しなかった大作である。歌舞伎衣装のエキゾチックな人物面という道具だての面白さと、金糸の刺繍が厚さ数インチも盛り上がっている布地の素晴らしさを、むしろアカデミックとあってよい腕達者な再現力で絵画に仕立てた力量ゆえか、第二回印象派展でも好評に迎えられ、1876年の売り立てでも2020フランの高値を記録した。そのように世間受けする肖像画を描くだけの力量を安易に見せびらかしただけでも見えるこのほぼ等身大(画面は高さ2.5メートルを上回る)の絵は、しかし西欧絵画にあらわれた異国風物描写の流れのなかに、また絵画と装飾との関係を摺む文脈のなかに位置付けてみると、とたんに変貌する。

異国情緒の衣装を纏ったモデルを室内に配する工夫は、トルコ趣味にはじまるオリエンタリズム絵画のなかで、すでに先例を見ている。トルコの後宮を空想で描いたヴァン・ローから、実際に東方旅行に旅立ったホルマン・ハント、エドワード・リア、ジョン=フレデリック・ルイスらに至るイスラーム圏の室内描写は、寺子屋の風景からハーレムの出来事、一家の団欒にいたる風俗をまことしやかに、演劇仕立てで、はたまたいくらか理想化された陽光溢れる豪華な空間に描き出していた。ヴェドゥインの風俗に生ける古典古代を見て取ったドラクロワの「アルジェの女」は1830年のアルジェ滞在のうちに得た記憶をもとに制作されたというし、アルフレッド・デオダンはモロッコで、ドラクロワの弟子テオドル・シャセリオはコンスタンティンでのユダヤ人の結婚の模様を、いわば民族学的な視線をもって描きだしている。

これとともに西欧にはオダリスクの系譜がある。夢幻的オリエントの女性像にはヴィクトル・ユゴーの『東方詩集』に見える捕らわれの白人女も影を落としているが、アングルの場合にはトルコの公衆浴場の記録などを追跡して練り上げた私的幻想であったものが、精確さを売り物にするジャン=レオン・ジ

ェロームにおいては誇大妄想的な浴場風景へと敷衍され、やがてはルノワールからマティスにいたる女性像造形の口実を提供することになる。

そうしたオリエント趣味の延長上にやがて日本も射程にはいつてくることは、例えばエジプト風俗画から出発したフランク・ディロンが1876年来日し、やがて日本の書画技法についての本を出版するに至ったという経緯にも、端的に現れる。1870年のサロンに出品されたアンリ・ルニョーの「サロメ」を指して、ゴンクールはああした原色の衣装が描かれるようになったのは日本の浮世絵の影響あればこそ、との見解を表明したし、実際にパリにあった日本骨董店からありったけの和服を買っていったとグイブリエル・ロセッティの手紙に記録のあるジェイムズ・ティソは、日本を舞台に「放蕩息子の帰還」という聖書の題材を翻案してみせた。そのかれは1867年にはすでに幕府將軍名代徳川昭武の〈書學教師〉を務めていたのだった。

モネの「ラ・ジャポネーズ」はいわばこれらふたつの潮流の交点に実現した異国風俗の肖像画といえようが、一見たんなる風俗画であるように見えながら、そこでは衣装に描かれた武士の姿があまりに現実的で、わざと金髪を鬘をつけて虚構であることを表示しているモデルの妻、カミーユを凌ぐ実在感を主張している。こうなるともはや服飾は風俗画の小道具とは到底言いがたく、むしろ装飾それ自体を描くことが絵画の目的であり、風俗画仕立ての舞台設定はそのための口実に成り下がる。衣装のなかの描かれた虚構の武士こそが画面の主人になりかわったこの主客転倒の地点から、今度は絵画そのものが室内装飾の道具立てへと変貌するのが世紀末の美学であって、絵画は壁画や衝立といった家具へと〈総合的〉に取り込まれ、自然環境と人工空間が融合する。その延長上にモネ晩年のジヴェルニーの庭園とその水蓮の壁画を据えるとき、われわれは「ラ・ジャポネーズ」が西欧19世紀絵画における異国風俗画から装飾芸術に至る系譜のなかで占めていた象徴的な意味を理解する。